

研究ノート

パレスチナ／イスラエルの「1948年」論争

金城 美幸*

1. パレスチナ／イスラエルの「1948年」

イスラエルとパレスチナの歴史において、1948年の出来事は重要な意味を持っている。1948年5月14日、イスラエルは国家としての「独立」を宣言した¹。同日、ヨルダン、レバノン、シリア、イラク、エジプトのアラブ5カ国は、パレスチナに侵攻する旨を宣言し、翌15日にそれを実行に移した。日本で「第1次中東戦争」と呼ばれる戦争の開始である。1949年には、イラクを除くアラブ4カ国とイスラエルとの間で順次休戦協定が結ばれ、「グリーンライン」と呼ばれる休戦ライン——イスラエルと近隣アラブ諸国との間の「国境」——が設定された。この間、約75万人のパレスチナ人住民たちが難民となり、その後約60年間、イスラエル政府は難民たちが故郷へ帰還することを阻み続けている。

イスラエル社会とパレスチナ社会では、この1948年に起こった出来事について、全く異なる歴史の語りが存在してきた。1948年の出来事について、イスラエル社会で用いられる一般的な呼称は、国家独立のための戦争としての性格を強調する「独立戦争 *milchemet ha-'atsmaut*」という語であり、イスラエルの歴史研究の場でも、同じ視点から1948年を捉える文章が量産されてきた。この「独立戦争」というナラティブが示してきたのは、イギリスの植民地支配の圧制²と、巨大なアラブ社会からの攻撃という二重の困難を克服したうえでの国家独立というナラティブだった。

これに対し、パレスチナ人は、故郷喪失と難民化の経験を、「戦争」としてではなく、「ナクバ *an-nakba*」(アラビア語で「大災厄」)として語ってきた。この語が示すのは、パレスチナに対するイギリス、シオニスト指導部の野心に翻弄され、混乱のなかで土地・財産などの資源を剥奪された(そして今日まで剥奪され続けている)パレスチナ人の破局の経験である。

両社会の間で1948年についての対立する語りが存在するなかで、本論で取り上げるのは、とりわけ1980年代以降、イスラエル人歴史学者とパレスチナ人歴史学者の間で展開されてきた1948年についての論争である。パレスチナ／イスラエルの歴史については、長きにわたる対立を背景に、大量の研究が行われてきた。それゆえに、パレスチナ／イスラエルの対立が構造化していくうえで決定的な出来事だった1948年に、実際に何が起こったのかという点について、議論の争点を見出すことは困難となっている。また、和平への道筋が困難であり、それぞれの社会に住む人びとの未来が未だ不確定な状況下で、1948年に起こった出来事の歴史記述は、極めて政治的なものともなっている。本論では、こうした困難を持つなかでの、パレスチナ／イスラエルの「1948年」の歴史記述をめぐる論争を描きながら、当時の文脈に即した歴史記述を行ううえでの視点を検討する。

イスラエル人歴史研究者、パレスチナ人歴史研究者の間の「1948年」論争が熱を帯びていったのは、1980年代以降であった。従来、1948年前後についての一次史料は、政府、外務省、国防軍が限定的に公刊する史料のみであり、当時の史料の包括的な調査は困難だった。しかし1970年代後半以降、イスラエルの国家アーカイヴス史料が公開され始め、一部のイスラエル人歴史研究者たちが、より「実証的な」歴史研究を発表し始めた。以降、従来は平行線を辿ってきたイスラエル人、パレスチナ人の歴史研究が、初めて同じ土壌で論争を行なえるようになったが、それでも両者の間には史料解釈の違いや、1948年の出来事が位置付く歴史的な文脈の理解において対立があった。

以下、2. では、論争の始まりを論じる。論争は、パレスチナ難民発生の原因と、1948年3月にシオニスト軍事組織が実行した「ダレット計画」(「ダレット」とはヘブライ語アルファベットの4文字目。以下、「D計画」)との

キーワード：歴史記述、独立戦争、ナクバ、住民移送、民族浄化

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2004年度入学 共生領域

関係をめぐって、イスラエル人歴史学者ベニー・モリスと、パレスチナ人歴史学者ワリード・ハリディの間で始まった。3.では、モリスとハリディとの論争を受けて、当時のシオニスト指導部によるパレスチナ人の「移送 *ha-transfer*」政策が、シオニスト軍事組織の作戦の背景だと論じたパレスチナ人歴史学者ヌール・マサルハの議論を記述する。4.では、1948年をめぐる歴史記述の論争に対して、イスラエル人歴史学者イラン・パペが新たに示した「民族浄化」という視点を論じる。

2. D計画とその事前計画性をめぐる論争

従来、「独立戦争」、「ナクバ」というナラティヴが完全に対立的であり、1948年についての理解も全く交差しなかったが、それが「論争」という形であれ、イスラエル人歴史学者、パレスチナ人歴史学者の間で議論可能になったことには、イスラエル人歴史学者ベニー・モリスの貢献によるところが大きい。彼は、1987年に発表した著作*The Birth of the Palestinian Refugee Problem*（『パレスチナ難民問題の誕生』）[Morris 1987]（以下、*The Birth*）において、パレスチナ難民の発生過程で「何が起こったのか」という論争的な課題に取り組んだ。公開された史料の調査によって、より「客観的」な実証研究を行ったモリスが試みたのは、「アラブ側」・「イスラエル側」双方の歴史のナラティヴの脱神話化だったと言える。

モリスは難民発生過程についての従来までの「アラブ側」・「イスラエル側」の主張を、次のように述べた。

アラブ側は一般的に、ユダヤ人側に政治的・軍事的な全体構想があり、その一部としての事前決定と事前計画によって、パレスチナのアラブ人を追放したと主張し、イスラエルは非道かつ非道徳的な強盗国家だと主張してきた。イスラエル側の公式見解では、アラブ人は（ユダヤ人の強制によってではなく）自発的に逃亡し、そして／あるいは、パレスチナ人やアラブ国家の指導者たちがそうするように求めた／命令したのだと主張してきた。[Morris 1987 : I]（傍線、〔 〕内は引用者、以下同様）

モリスは膨大な量の文書史料の検証によって、以上の「アラブ側」・「イスラエル側」それぞれの主張を退けた。まず、「イスラエル側」の主張に対し、当時のアラブ指導部の対応を描き出しつつ、以下のように結論づけた。

おそらくパレスチナ内外のアラブ指導部は、その後の運命を決定付けた〔1948年〕4月の1ヵ月間、深刻な分裂状態にあった。アラブ指導部は、一般市民が避難している状況に直面しても、確固たる政策を持っておらず、パレスチナ人に対してどのように対応するかや、何を行なうかについて、終始一貫したガイドラインや指示を出さなかった。その意味では、〔パレスチナ人の〕脱出を早める役割を果たした。〔アラブ指導者の対応を示す〕記録が不十分だが、彼らは圧倒的に混乱状態にあり、見当違いな方向を向いており、「政策」は毎週、地域ごとに変化していた。[Morris 1987 : 289]

イスラエル人歴史学者のモリスが「イスラエル側」の公式見解の誤りを指摘したことは、イスラエル社会に衝撃を与えた³。しかしイスラエル社会にとってそれ以上に衝撃的だったのは、モリスがイシューヴ（パレスチナのユダヤ人コミュニティ）の諸民兵組織（主力はハガナー、エツェル〔別称：イルゲン〕、レヒ。後にイスラエル国防軍に編成される。以下、「ユダヤ軍」）による暴力行為が、パレスチナ人の難民化を促したという出来事を、事実として語ったことだった。モリスは「〔パレスチナ人村に対する攻撃の〕多くの場合において、逃亡の最終的かつ決定的引き金だったのは、ハガナー、エツェル、レヒ、あるいはイスラエル国防軍の攻撃か、こうした攻撃に対する住民の恐怖のためだった」[Morris 1987 : 294] ことを示し、「アラブ側」の主張の一部を事実と認定した。従来のイスラエル社会において、1948年に存在したユダヤ軍による暴力行為・追放への言及は、建国史における「タブー」の侵犯であり、記憶されつつも語られなかった事実だった [Beinin 2005 : 9]。

しかし「アラブ側」の主張の一部を事実と認定したとは言え、モリスの歴史記述とパレスチナ人の歴史記述との間には明確な対立があった。それはパレスチナ人の追放という事実の背後に「政治的・軍事的な全体構想があり、

その一部としての事前決定と事前計画」があったかどうか、という点をめぐる対立である。

パレスチナ人歴史学者ワリード・ハーリディは*The Birth*出版より前に、D計画について論じ、シオニスト最高司令部 (the Zionist High Command) が事前に準備していた「マスタープラン」の存在を主張していた [W. Khalidi 1961]⁴。ハーリディが説明するD計画とは、シオニスト指導者たちが、イギリス委任統治後の権力の空白を見越すなか、「シオニスト最高司令部によって名づけられ、決定された、軍事作戦のための基本計画」であり、この計画は将来のユダヤ国家となるべき土地に「軍事的既成事実を打ち立てるために計算されたもの」だった [W. Khalidi 1961 : 22]。ここでハーリディが強調したのは、イギリス委任統治終了に備え、軍事攻撃によってユダヤ化された領域を打ち立て、ユダヤ国家建国に向けての不可逆なステップを踏み出そうという意図が、予めシオニスト指導部内に存在した、という点である。

一方、モリスによれば、D計画の目的はあくまでアラブ軍からの攻撃の「危機に瀕したユダヤ国家の安全保障」と、国連分割決議で示された「境界線の外側にあるユダヤ入植地の防衛」だった。彼の説明では、この計画が決定された時期は、イギリス委任統治撤退 (1948年5月15日) 以前だったが、決定主体はシオニスト指導部ではなく、ハガナー指導者たちだとされた。モリスはD計画の性格を「軍事的な考慮から決定されたものであり、また軍事的目的の達成のために実行され」たものとし、その枠組みのなかで実行された攻撃は、「パレスチナのアラブ人追放のための政治的な計画ではなかった」 [Morris 1987 : 62] と評価した⁵。つまりモリスは、D計画は「アラブ軍の侵入」に対する「安全保障」および「防衛」のための場当たりの計画だと強調したのだった。

ハーリディはこのモリスの議論を受け、雑誌『パレスチナ研究誌』に同じ論文を再掲し [W. Khalidi 1988]、モリスによるD計画の解釈へ反論した。ハーリディは、再掲された論文の序で、以下のように述べた。モリスは「パレスチナ人の脱出を、歴史の真空状態 (historical vacuum) において眺めている。確かに彼は、1948年以前の段階での、シオニスト指導部のサークル内における、アラブ住民の「移送」(追放expulsionの婉曲表現) の議論に言及するが、彼はこれとD計画との間の連関が全く存在しないと理解している」 [W. Khalidi 1988 : 5] との批判を投げかけた。

ハーリディが指摘した、移送構想についてのモリスの言及は以下の通りである。

1930年代半ばから、ベングリオンを含むイシューヴ指導者たちは、アラブ人マイノリティが存在しない、あるいは存在してもそれが出来る限り少数に留まるようなユダヤ国家建設を望み、このマイノリティ問題に対して「移送による解決 (transfer solution)」を指示した。しかしイシューヴは、1948年戦争に突入する際、アラブ人追放のためのマスタープランを持っていた訳ではなかったし、イシューヴの政治的・軍事的指導者たちはこうしたマスタープランを適用しなかった。(中略) 追放についての全体構想や包括的政策は存在しなかった。 [Morris 1987 : 17]

モリスは、1930年後半代以降から「自然発生的で、計画性のない移送案」 [Morris 1987 : 134] が存在したと論じるが、この移送案とD計画との連関は否定した。その彼の論拠は、この連関を示す証拠となる文書史料が存在しないことである。しかし、モリスが調査を行なった当時、軍事文書の全てが閲覧可能となっていた訳ではない。アーカイヴス史料の公開基準を定めた「国家アーカイヴス法」(1955年制定、64年と81年に修正) では、行政・外交関係文書は作成の30年後から公開する旨が規定されているが、軍事関係文書の公開は原則50年後からとなっている。独立50周年 (1998年) 行事に合わせ、80年代半ばから一部の軍事関係文書も閲覧可能となってきたが、あくまで限定的だった。モリスが主張する史料の不在とは、彼自身の調査の過程で当該の文書・文献史料に出会わなかった、ということにすぎない。この点において、彼の主張した「客観的な」事実の記述という方法論は不十分なものであった。実際、後にイラン・パペは、D計画へのイシューヴ指導部の関わりについて史料の調査をし、D計画策定とイシューヴ指導者らの具体的な関わりを実証し、ハーリディの見解を追証することになる [Pappe 2006]。

3. 「アラブ人移送」構想をめぐる論争

モリスは、シオニスト指導部の「移送」構想とD計画との連関を主張するハーリディの批判を受け、*The Birth*改訂版 [Morris 2004] では、「アラブ人移送」について新たに次のように論じた。

少なくとも、1920年代あるいは1930年代に遡れば、パレスチナのアラブ人たちは、確固たる「民族 people」として自分たちを見ていなかったし、他のものたちからもそのようには見られていなかった。彼らは「アラブ人」として、あるいはより具体的に言うなら、「南シリアのアラブ人」だと見なされていた。それゆえ、彼らをナブルスやヘブロンからトランスヨルダン、シリア、そしてイラクへすらも移送することは——とりわけ適切な補償が受けられるならば——故郷からの追放と同義ではないだろう。 [Morris 2004: 42]

モリスはここで、土地に根ざしたパレスチナ人独自の民族的集合性が委任統治期からすでに存在していた、というパレスチナ人自らの主張 [R. Khalidi 1997] とは反対に、パレスチナ人を「アラブ人」の一部として取り扱おうとしている⁶。モリスのこの議論は、委任統治期に区画されたパレスチナという領域が、かつて南シリアの一部として存在し、他のアラブ地域との共同性を作ってきた歴史を強調することでパレスチナ人独自の集合性を否定し、パレスチナ人とパレスチナの土地との固有の関係性を否認し、移送を正当化しようとするものである。

モリスが新たにパレスチナ人の移送構想について論じた背景には、パレスチナ人研究者ヌール・マサルハの議論がある。マサルハは、モリスが*The Birth*初版で焦点化しなかったシオニスト指導者たちの移送構想を、委任統治期からすでにパレスチナ人の集合性が存在したという視点から批判的に分析した [Masalha 1992]。ハーリディと同様にマサルハは、シオニスト指導者たちの思想史を論じるうえで「アラブ人移送」という構想を、「パレスチナの先住民の組織的除去を意味する婉曲表現」として捉えたが、それがシオニズム運動の論理的帰結であるだけでなく、常にシオニスト指導部の間に存在していた、と論じた。

従来の議論では、入植活動が本格化する以前のシオニストたちにとって、パレスチナ地域に暮らすアラブ人は考慮の外にあったと論じられてきた。彼らが「アラブ問題 *ha-be'ayah ha-'aravit/ha-sheelah ha-'aravit*」として、シオニズム運動において可視化された存在となるのは、シオニストたちの入植活動のなかで実際にパレスチナの先住民と遭遇する過程だったと理解されてきた [Caplan 1978]。しかしマサルハの主張は、「アラブ問題」は1880年代の入植活動開始の時期から存在し、その時期からシオニストたちがパレスチナ人の移送構想を持っていた、という点だった。つまり、マサルハの議論では、移送構想は、「政治的シオニズム」の創始者テオドル・ヘルツェルの登場以前から、1880年代の宗教的な動機に基づいたロシア系ユダヤ人の個別の入植活動においてもすでに存在したとされる。そして、世界シオニスト会議設立 (1897)、第2波アリアー (ヘブライ語で「昇ること」。パレスチナへの移住を指す) が主体となって進めたイシューヴ建設の過程で移送への言及が増え、バルフォア宣言 (1917) やピール王立調査委員会によるパレスチナ分割案 (1937年) というイギリスの後押しによって、公的に語られるようになったという変遷が論じられている。

しかし1880年代からシオニスト指導者たちが一貫した移送構想を持っていたと断定するには疑問の余地がある。この点はイラン・パペも指摘している。パペは、マサルハの捉え方が、歴史についての「還元主義的」な評価に陥る危険性があることに警鐘を鳴らしている。

[マサルハが] シオニズムに対していくぶん還元主義的な見方を持っている可能性がうかがえる。シオニスト・イデオロギーは移送という考えのみを構想していた訳ではない。シオニスト指導者たちは、委任統治期を通して、他の解決法を提示したし、その全てが移送に直接的に関連付けられていたわけではない。さらに何よりも、指導者たちは両義的な立場を見せていた。 [Pappe 2003]

移送構想をシオニズム運動に一貫して内在してきたものと捉えるマサルハの議論に対し、パペの議論は非常に慎重である。このパペの姿勢は次のような、「苦難のナラティヴ」に対する問題意識による。パペは、「苦難のナラテ

イヴは、過去の集合的悪を描く解釈学的な構図であり、それはしばしば現在の所与のコミュニティが、将来の条件改善のための政治的必要性のために使われる」[Pappe 2001: 12] (イタリックはパペ) と述べ、「ナクバ」の経験を記述しようとするパレスチナ人のナラティブが、歴史に対する「還元主義」的な解釈に陥る可能性に注意を促している。この姿勢は、ホロコーストという「苦難のナラティブ」がイスラエル国家建国の正当性を強化する議論へと収斂していった過程を踏まえようとするものである。モリスの議論からもマサールハの議論からも距離を取ろうとするパペは、当時のシオニスト指導者たちのスタンスに対して、次のような見解を提示する。「[パレスチナ人の] 追放は、シオニスト運動の原則的な目的ではなかったが、シオニストたちが〔パレスチナに〕存在することの避けられない帰結だったと言えるかもしれない」[Pappe 2003]。

シオニズム運動内でのイデオロギー対立を振り返れば、このパペの主張は適切である。イシューヴ内で最も影響力を持った労働シオニズム運動の、「ヘブライの労働」・「ヘブライの土地」の創設という教義にとって、「アラブ問題」はそもそも不可避だった。しかし労働シオニズム指導者の思想のなかには、他の構想（例えばアラブ国家との連邦制）が選択肢にあったのも事実である⁷。労働シオニズム運動の指導者ベングリオンの思想の中心は、少なくとも1930年代までは「労働者階級の団結を通じてユダヤ人とアラブ人の和解を図ろうとする社会主義理念」[森 2002: 227] にあった。そして、このベングリオンの社会主義思想が、「民族分離主義」に歯止めをかけてきた側面も否定できないだろう。

ベングリオンが「アラブ人移送」を積極的に口にするのは、1930年代後半以降だった。この時期、パレスチナ人の「大反乱」が起り、パレスチナ人とユダヤ人入植者との間の緊張関係が激化した⁸。パレスチナ人の激しい抵抗運動を受け、イギリス政府が設立したピール王立調査委員会がパレスチナにやって来たとき、シオニスト指導者たちは、この機会をとらえてユダヤ国家設立のための積極的なロビー活動を行った [Masalha 1992: 55-56]。そこでは、ユダヤ国家とトランスヨルダンとの間でのパレスチナ分割が交渉されたが、この分割ではパレスチナ人の移送案が含まれていた [森 2002: 184]⁹。

ピール委員会の分割案は、シオニズム運動にとっての1つの画期だった。それは、イギリス政府が「アラブ人移送」を、「住民交換」を正当化する国際的なコンセンサスのなかに位置付けたためである。ピール分割案では、ユダヤ国家、アラブ国家の境界線と、その境界に基づいて「住民交換」が提案された。これはギリシア・トルコ間の戦争（1922年）後に結ばれたローザンヌ条約（1923年）における130万人のギリシア人と40万人のトルコ人の住民交換の先例に倣ったものだった。これは第1次世界大戦後のオスマン帝国とオーストリア・ハンガリー帝国の崩壊によって独立国家が多数誕生したなかで起こった境界線の決定と、それに伴う住民移送の流れに位置づくものである。こうした住民移送を伴う国民国家建設を正当化したのは、ここでは民族という「文化的単位」と国家という「政治的単位」の一致を目指す「民族自決」の原則だった。そのなかで住民移送は、「民族自決原則と現実の国境線との不整合が生み出した少数民族問題の処方箋」として存在し、この処方箋に準じる形でパレスチナでの「アラブ人移送」も国際的な承認を得たのだった [森2002: 181-2]。

このように、住民移送という視点から「アラブ人移送」構想をとらえ返すと、1948年についての新たな問題設定が可能となる。それは20世紀に世界的に見られた国境の設定／再設定のなかでの土地と住民（国民）の確定という文脈から、イスラエル建国およびパレスチナ分割を理解することである。

4. 「民族浄化」という視点

イスラエル人歴史学者イラン・パペは、モリス、ハーリディ、マサールハの議論の問題点を踏まえつつ、パレスチナ／イスラエルの「1948年」を記述する新しい方法として、「民族浄化」という視点を提起している [Pappe 2006]。パペは「マスタープラン」として存在したD計画の実態が、今日議論されるような「民族浄化」に当てはまると論じた¹⁰。

ここでパペは「民族浄化」の定義として、1990年代の旧ユーゴスラヴィアでの内戦以降、主に国連や米国務省で一般的に用いられてきた定義を挙げ、「特定の地域あるいは領域における、民族の入り混じった集団を均質化するた

めの、力による追放」[Pappe 2006 : 2] だと説明した¹¹。この議論においてパペが試みたのは、D計画は今日では「民族浄化」という国際法上の犯罪であるという点の強調だった [Pappe 2006 : xiii]。

「民族浄化」の作戦として1948年のユダヤ軍の軍事行動を語るパペの議論の組み立ては、パレスチナ人の「ナクバ」のナラティヴが、イスラエル社会において承認されることを目的としたものだった。パペが示したのは、1948年の出来事を「戦争」と総括する歴史観（パペの言う「パラダイム」）への批判意識だった。

私はこの事例を民族浄化のパラダイムにのせ、それを1948年についての学術研究と大衆的議論の基礎とし、戦争のパラダイムと置き換えるために用いたい。大災厄 [=ナクバ] が起こったという事実の否認が、これほど長くの間可能となった理由の1つが、[1948年の出来事を語るうえで] 民族浄化のパラダイムがこれまで存在しなかったためであることは疑いない。(中略) ナクバという語は、ユダヤ人のホロコースト（ショアー）の道徳的重さに対抗する試みとして、納得のいく理由のために使われている。しかし当事者を除けば、その語はある意味で、1948年とその後のパレスチナで民族浄化が起こったことが、世界から否認され続けることに貢献してきた。[Pappe 2006 : xvi-xii]

ここでパペは、「独立戦争」における「戦争」という歴史観、またモリスの議論においても見られた「戦争」という歴史観に対し、その問題設定の不適切さを学術的に問い返そうとしている。しかしその一方、D計画の犯罪性が否認されてきた状況を、「道徳的立場」から「告発」する姿勢を見せている [Pappe 2006 : xvi-xviii]。パペは「大災厄 catastrophe」を物語る「ナクバ」のナラティヴについて、この災いは自然発生的なものではなく、犯罪行為によってもたらされたものだとの意味を強調している。それは同時に、アラビア語で語られるパレスチナ人の固有の経験を隠蔽する、イスラエル社会における「ナクバ」の否認に対する批判である。

しかし、1948年のユダヤ軍の攻撃作戦を「民族浄化」と断定するパペの議論の組み立ては、いささか性急である。D計画を上にしたような「民族浄化」作戦だと断定するパペの根拠は、1948年のD計画実行の場面において、パレスチナの「浄化 *tihur*」という用語が実際に用いられていたという点に求められている [Pappe 2006 : 131-3]。パペはこの「浄化 *tihur*」というメタファーによって実行されたD計画と、ユーゴ内戦での「民族浄化 ethnic cleansing」とを同質のものとして扱っている。この点は、「浄化 *tihur*」という概念が具体的に用いられた場面に即した検討が必要であり、1990年代以降に登場した犯罪行為としての「民族浄化」の概念を用いて、1948年当時の歴史を物語るパペの作業は、パレスチナ／イスラエルの1948年とユーゴ内戦当時の比較という視点によって、精査されなければならない。

しかし、「民族浄化」の現象は、特に20世紀のナショナリズムがもたらした数々の暴力を、旧ユーゴ内戦が提起した「民族浄化」の暴力行為と照らし合わせ、国民国家との関係で理論的な整理が可能である ([Bell-Fialkoff 1996]、[Várdy and Tooley 2003]、[佐原 2005])。そこで提起される「民族浄化」は、犯罪行為としてだけでなく、近代国民国家形成の歴史についての分析概念となりうる。この意味における「民族浄化」の視点を、1948年の出来事を記述する上で用いれば、パペの提起した視点はより示唆的なものとなる。

20世紀の歴史を振り返れば、「民族浄化」の事例に当てはまるものの多くは、二度の世界大戦以降に戦後処理として、国境の再画定が行なわれた地域である。代表的なものは、第1次大戦後以降のバルカン半島、ギリシア・トルコ間の住民移送やキプロス問題、第2次大戦後の旧ドイツ領からのドイツ人追放などである。「もともとの故郷に暮らす集団の住民交換」も、「民族浄化」に含まれる点 [Várdy and Tooley 2003 : 3] を踏まえれば、「アラブ人移送」を「民族浄化」の政策であると説得的に論じることができる。

しかし、先に指摘したように、「民族浄化」を近代国民国家形成の歴史についての分析概念として用いれば、この両義性を克服し、「民族浄化」という視点からのより説得力ある議論が可能である。旧ユーゴの「民族浄化」を調査した国連専門家委員会中間報告で、「民族浄化」は「別の集団の構成員を除去するために、武力行使、あるいは脅迫を使って、ある地域を民族的に均質なものにすること」と定義された。この現象は1930年代以降の「多くの国家建設者と民族解放運動のプログラムの本質的な要素」[Hayden 1996 : 733] でもある。佐原は、国民国家創造には、「民族浄化」が本質として備わっていることを次のように述べている。

「民族浄化」とは、エスニックな特性によって定義された民族が国家主権の基礎となるという国民国家理念に基づいて、こうした国家を建設、強化、維持、拡大するために、その現実、もしくは潜在的な領土となる領域から、主権民族の構成員以外の人々を、強制力を行使しつつ排除する行為である。つまり、民族浄化とは、(中略)近代国民国家が内包する特有の病理である。[佐原 2005: 195-6]

こうした「民族浄化」概念を使うことによって、「還元主義的」なパレスチナ人の苦難の歴史のナラティブから脱却するという、バベが目指した方向へと進むことができる。また、このように「民族浄化」概念を用いることで、「1948年」の加害／被害関係だけでなく、1948年に至るまでのパレスチナ人とイスラエル人との間の暴力行為の激化の過程も説明することができる。つまり1930年代、シオニストたちの居住地への攻撃を加えるパレスチナ人と、パレスチナ人の追放に政策転換するシオニスト指導部との暴力の相互性を、国民国家建設を目指す両社会の「病理」である「民族浄化」の歴史として捉えることができる。この捉え方は、イシューヴとパレスチナ人社会との間の暴力の応酬を、問題の根源とするものではない。「ナクバ」のナラティブがイスラエル社会において否認され続けてきた点を踏まえたいうで、しかしシオニスト運動を絶対的な悪として描くのではなく、両社会の加害／被害関係を歴史的文脈に即して捉え直そうとするものである。

以上のように、バベの提起した「民族浄化」をより広く分析概念として捉えれば、パレスチナ／イスラエルの「1948年」と、それに至る過程とをよりよく理解できる。さらに、「民族浄化」という概念をより広く理解することによって、ホロコーストという出来事をも「民族浄化」として考えることができ、「ナクバ」との共通性を論じることが出来る。これまで、イスラエル社会では、ホロコーストと「ナクバ」の比較はタブーとされてきた。しかし、「民族浄化」という概念によって可能となる歴史記述は、イスラエル社会とパレスチナ人の歴史のナラティブをつなげ、こうした状況を打開する可能性を広げるはずである。

注

- 1 ヘブライ語では「独立宣言 *charzat ha-'atsmaut*」だが、公式の英訳は「国家樹立宣言 Declaration of the Establishment of the State of Israel」となっている。
- 2 イギリスはバルフォア宣言（1917年）によってシオニズム運動を後押ししたが、パレスチナでの委任統治期を通して一貫して親シオニスト的だった訳ではない。とりわけパレスチナのアラブ人の反発が激化した1930年代後半以降、委任統治政府はシオニストの活動に制限を加えた。1939年のマクドナルド白書は、ユダヤ人の移民と土地取得に制限を加えたため、シオニスト（とりわけ右派修正主義政党系の民兵組織）の間で対英「テロ」活動が活発になり、委任統治政府による大弾圧を招いた。
- 3 その他、イスラエル社会において言説化されてきた「建国神話」を指摘するものとしては [Flapan 1987]、[Sternhell 1998]、[Shlaim 1995]などを参照。
- 4 ただしこのハーリディの研究は、彼自身がD計画についての一次史料を発掘し、その存在を実証したものというより、イスラエル人によって英語で出された先行研究 ([Kimche and Kimche 1960]、[Lorch 1961])に基づく議論だった。またキムヘ&キムヘとロルチが参照した史料をさかのぼると、ハガナーの歴史を描いた [Zerubavel 1953] と [Tsva Hahagana Le-Yisrael 1955] にたどり着く。ヘブライ語で書かれたこれらの歴史書のなかで、ハガナーの軍事作戦としてD計画についてすでに述べられていた。キムヘ&キムヘ、ロルチは、英語を用いてD計画の存在に触れた最初の研究者たちであった [Khalidi 1961]。しかしこれらの文献では、D計画を始めとしたパレスチナのアラブ人への攻撃は「独立」のために必要な行動だったと論じており、「独立戦争」というナラティブを支えてきた。
- 5 モリス自身は*The Birth*初版ではハーリディの論文を参考文献としては挙げていない。
- 6 これは、1930年代以降の実質的最高責任者であり、後にイスラエル初代首相となるベングリオンの見解と重なり合うものと言える。[Flapan 1987: 131]
- 7 労働シオニズムの主張と与さないシオニストたちの間では、小規模ではあれブリット・シャローム（ヘブライ語で「平和連合」。1925年にユダヤ人とアラブ人の和解をめざして創設された組織で、マルティン・ブーバー、ユダ・マグネスらが参加）のメンバーなど、二民族国家の構想を提示するものもあった。
- 8 しかしこの間、職場やコミュニティにおけるユダヤ人・アラブ人の共生の経験が完全に中断した、というわけでもない。とりわけ鉄道・通信などの公共セクターでは、ユダヤ人・アラブ人合同のストが見られた [Pappe 2004: 108-116]。
- 9 ユダヤ国家建設に向けてイシューヴが積極的な交渉を行うようになった背景には、パレスチナ人との対立の激化という理由のほかに、ドイツからユダヤ人が大量に流入したことによりイシューヴが強大化し、ユダヤ国家建設に向けての展望が開けた、という理由がある。

- 10 ただしここでもパペは、D計画の策定・実行を、単なるシオニズムのイデオロギーの実質化としてではなく、それを可能とさせた当時の文脈に注意を向けている。「この〔D〕計画は、ユダヤ人だけのものとして存在する国家をパレスチナに建設するという、シオニストのイデオロギー的な衝動の不可避な産物であるとともに、イギリス政府が委任統治の終了を決定した土地で起こったことへの対応でもある。〔シオニスト指導部が〕民族的に浄化されたパレスチナ、というイデオロギー的な構想を実行に移すうえで、パレスチナ人現地民兵との衝突は、その十分な文脈と口実となった。シオニストの政策は当初、1947年2月のパレスチナ人側からの攻撃への報復に基づいており、1948年3月にはそれが地域全体の民族的な浄化へのイニシアティヴへと変容した」[Pappe 2006 : xii-xiii]。パペは、シオニズム運動における一貫した思想だとするマサールハの見方に留保を付けながらも、この「浄化」の構想が、イスラエル建国以降の対パレスチナ人政策の背景として受け継がれたものだと論じた。
- 11 旧ユーゴの「民族浄化」の究明のための国連専門家委員会が提出した民族浄化についての包括的定義は、以下の通りである。「ある民族集団あるいは宗教集団が、他の民族集団あるいは宗教集団に属する民間人を、強制力の行使や脅迫によって、特定の地理的領域から除去するための、意図的な政策である。かなりの割合で、それは誤った方向に向かったナショナリズム、歴史的不満、そして報復に対する突き上げるように強い感情の名において実行される」[UN. Commission of Experts 1994 : 33]。佐原も指摘していることだが、「意図的な政策」の下で実行された暴力行為のみを「民族浄化」を捉えることでは、その意味が限定的なものとなる。その結果、「民族浄化」を目的とした国連専門家委員会が発足した当時には、「民族浄化」は発生しなかったという論理の破綻が生じた[佐原 2005 : 171]。また、「民族浄化」の現象の一つには、草の根から生まれ、住民全体が自発的かつ積極的に関与する状況も含まれる。この際、この暴力行為に上部機関からの何らかの指示があったかどうかの特定が困難である点も、専門家委員会から報告された。このように、旧ユーゴでの「民族浄化」を定義しようとする国連機関の試みも、問題含みであったと言える。

参考文献

- Bar-Joseph, U. 1987. *The Best of Enemies, Israel and Transjordan in the War of 1948*. London: Frank Cass & Co.
- Beinin, J. 2005. "Forgetfulness for Memory: The Limits of the New Israeli History." *Journal of Palestine Studies*. Vol. 34, No. 2 (Winter) : 6-23.
- Bell-Fialkoff, A. 1996. *Ethnic Cleansing*. New York: St. Martin's Griffin.
- Caplan, N. 1978. *Jewry and the Arab Question, 1917-1925*. London: Frank Cass.
- Cohen, M. 1982. *Palestine and the Great Powers, 1945-1948*. Princeton: Princeton University Press.
- Flapan, S. 1987. *The Birth of Israel: Myths and Realities*. London : Croom Helm.
- Hayden, R. M. 1996. "Schindler's Fate: Genocide, Ethnic Cleansing, and Population Transfer." *Slavic Review*, Vol. 55, No. 4 (Winter) : 727-748.
- Karsh, E. 1997. *Fabricating Israeli History: the 'New Historians'*. London: Frank. Cass.
- Khalidi, R. 1997. *Palestinian Identity: the Construction of Modern National Consciousness*. New York: Columbia University Press.
- Khalidi, W. 1961. "Plan Dalet: The Zionist Master Plan for the Conquest of Palestine." *Middle East Forum*, Vol. 37, No. 9 (November) : 22-28.
- _____. 1988. "Plan Dalet: Master Plan for the Conquest of Palestine." *Journal of Palestine Studies*. Vol. 18, No. 1 (Autumn) : 4-33.
- Kimche, J. and D. Kimche. 1960. *A Clash of Destinies: The Arab-Jewish War and the Founding of the State of Israel*. New York: Praeger.
- Lorch, N. 1961. *The edge of the sword: Israel's War of Independence, 1947-1949*. New York: Putnam's.
- Masalha, N. 1992. *Expulsion of the Palestinians: the Concept of "Transfer" in Zionist Political Thought, 1882-1948*. Washington, D.C.: Institute for Palestine Studies.
- Morris, B. 1987. *The Birth of the Palestinian Refugee Problem, 1947-1949*. Cambridge: Cambridge University Press.
- _____. 1988. "The New Historiography: Israel Confronts its Past." *Tikkun*, Vol. 3, No. 6 : 19-32, 99-102.
- _____. 1991. *Leidatah shel Be'ayat ha-Plitim ha-Falastininim, 1947-1949*. Tel Aviv: Am Oved.
- _____. 2004. *The Birth of the Palestinian Refugee Problem Revisited*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 森まり子 2002. 『社会主義シオニズムとアラブ問題—ベングリオンの軌跡 1905-1939』 岩波書店
- Pappe, I. 1988. *Britain and the Arab-Israeli Conflict, 1948-51*. London and New York: St. Antony's/ Macmillan Series.
- _____. 1992. *The Making of the Arab-Israeli Conflict: 1947-1951*. London and New York: I.B. Tauris.
- _____. 2001. "Fear, Victimhood, Self and Other." *The MIT Electronic Journal of Middle East Studies*. Vol. 1 : 4-14.
- _____. 2003. "The History, Historiography, and Relevance of the Palestinian Refugee Problem." *Journal of Philosophy of International*

- Law and Global Politics*. [Electronic version]. Retrieved April 15, 2004 from <http://www.juragentium.unifi.it/en/surveys/palestin/pappe.htm>
- _____. 2004. *A History of Modern Palestine: One Land, Two Peoples*. Cambridge: Cambridge University Press.
- _____. 2006. *The Ethnic Cleansing of Palestine*. Oxford: Oneworld Publications Limited.
- Sa'di, A. and L. Abu-Lughod eds. 2007. *Nakba: Palestine, 1948, and the Claims of Memory*. New York: Columbia University Press.
- 佐原徹哉 2005. 「民族自決と『民族浄化』—ある翻訳の帰結」真島一郎編『だれが世界を翻訳するのか——アジア・アフリカの未来から』人文書院 167-208.
- Shlaim, A. 1988. *Collusion Across the Jordan: King Abdullah, the Zionist Movement, and the Partition of Palestine*. New York: Columbia University Press.
- _____. 1995. "The Debate on 1948." *International Journal of Middle Eastern Studies*. Vol. 27, No. 3 : 287-304.
- Sternhell, Z. 1998. *The Founding Myth of Israel*. Princeton: Princeton University Press.
- United Nations, Commission of Experts 1994. *Final Report of the Commission of Experts Established Pursuant to Security Council Resolution 780 (S/1994/674)* (May 27th).
- 白杵陽 1998. 「イスラエルにおける「修正主義」—「歴史家」にとっての戦争、イスラエル建国、そしてパレスチナ人」『歴史学研究』第712号 歴史学研究会 17-25.
- Várdy, S. B. and T. H. Tooley eds. 2003. *Ethnic Cleansing in Twentieth-Century Europe*. New York: Columbia University Press.
- Tsva Hahagana Le-Yisrael 1955. *Qravot* 5708. Tel Aviv: Marakhot.
- Zerubavel, G. eds. 1953. *Sefer Ha-Palmach*. Vol.1 and 2. Tel Aviv: Ha-Kibbutz Ha-Me'uchad.

The Debate on “1948” in Palestine / Israel

KINJO Miyuki

Abstract:

This paper discusses the debate about “1948” between Israeli and Palestinian historians after the 1980s. Next, it discusses different perspectives of the historiography of “1948” in Palestine/Israel.

From 1948 to 1949, after the State of Israel proclaimed its independence, neighboring Arab countries invaded Palestine, creating approximately 750,000 Palestinian refugees. Since then, there have been conflicting historical narratives of “1948.” The Israeli narratives have described the event as a “War of Independence” against the Arabs and the British Mandate. In contrast, the Palestinians have narrated it as “*Nakba*,” “catastrophe” in Arabic, expressing the Palestinian collective memory of dispossession of land and property.

My discussion makes three points. The first regards the debate between an Israeli historian, Benny Morris, and a Palestinian historian, Walid Khalidi, which disputed the relationship between the Zionist militias’ “Plan Dalet” and the cause of the Palestinian refugee crisis. The second focuses on the argument of a Palestinian researcher, Nur Masalha, who discussed the Zionist leadership’s “transfer” policy against the Arab population as the background of the Zionist military actions. The last point treats the discussion by Ilan Pappé, an Israeli historian, who reinterprets “1948” from the perspective of “ethnic cleansing.”

Keywords: historiography, War of Independence, *Nakba*, population transfer, ethnic cleansing